

(別紙2)

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 金 相美

本論文は、社会心理学的観点から、韓国社会でしばしば議論される縁故主義が、インターネット上のサイバーコミュニティへの参加とどのような関連をもつかについて実証的検証を試みたものである。サイバーコミュニティへの参加が縁故主義に及ぼす影響については、先行研究において、大きく「縁故強化仮説」と「情報縁補完仮説」の二つの議論が存在する。前者は、サイバーコミュニティがむしろ既存の縁故関係を強化するツールとして機能するという仮説であり、後者はサイバーコミュニティが現実世界において不足している社会関係資本を補完し、縁故主義を解体する方向に機能するという議論である。論文では、社会関係資本の概念について整理した上で、韓国社会の近代化過程における縁故主義の形成・変容・実態について考察し、一方で、韓国におけるインターネットの利用実態およびサイバーコミュニティの機能を論じ、日韓比較調査をもとに、縁故主義とサイバーコミュニティの関係を実証的に検証した。分析の結果、サイバーコミュニティの縁故主義に及ぼす影響は限定的であることが明らかにされている。

本論は以下の七章から構成されている。

第一章では、本論の重要な分析概念である社会関係資本について、その概念に関する歴史的変遷およびそれらの構成要素等について考察がなされている。本論では、社会関係資本を個人間や組織間のネットワークに埋め込まれた資源としてみなし、とくに韓国社会において強固な「結束型社会関係資本」の特性について詳細に分析している。また、韓国の「橋渡し型関係資本」については、互惠性による自発的動機の確保が難しく、その実態についても従来の研究では十分解明・理論化されていないことが指摘されている。第二章においては、韓国における「縁故主義」がいかなる歴史的プロセスをもって発展してきたのかについて考察がなされている。韓国における縁故主義に関する議論は大きく二側面に分けて捉えることができる。一つは、主に政治・経済的エリートによって進められた近代化過程において、血縁による通婚とそれによる政経癒着、特定地域差別をも含む地域主義としての地縁の発展、主に陸軍士官学校出身者による学縁の形成、という側面で進行した縁故主義の展開である。もう一つは、一般市民側における生活上の実利的側面を多分に含んだ縁故主義の形成である。本論文の二章では、主に前者を中心に考察が展開されている。第三章においては、韓国の一般市民の日常生活において、縁故主義がいかに定着し、縁故主義に立脚した行動がどのような社会心理学的メカニズムを持っているのかについて論じられている。第二章で論じられた、「縁故主義」を介した少数の政治経済エリート層による社会システムの形成は、その道具的利用価値の重要性を社会全般に行きわたらせ、組織原理・対人関係形成の原理として一般市民にも定着していくことになる。本章ではまた、地縁・血縁・学縁の複合体である縁故の中でも、韓国の現代社会において地位獲得・上昇にとって極めて重要な要素であり、同時に社会的に頻繁にその問題性が議論され続けている学縁について、とくに焦点を絞り、議論を進め

る必然性についても記述している。第四章においては、日韓比較調査の分析結果をもとに、実生活における縁故関係の重要性・実用性への評価、縁故関係への実態的かかわり等について分析されている。また、韓国における先行的調査結果と照らし合わせながら、それらの時代的変遷が議論されている。

以下の第五章から七章では、論文提出者が関与した日韓比較調査に基づき、縁故主義とサイバーコミュニティの機能に関して実証的考察がなされている。まず、第五章においては、サイバーコミュニティへの参加行動の日韓の比較分析がなされている。その結果、日本より韓国の方がサイバーコミュニティへの参加が活発であり、アクセス・書きこみ頻度等が高いことが明らかにされた。コミュニティの種類別で見れば、日本は情報交換型コミュニティの利用が活発であり、一方、韓国では主に対人関係維持・形成を動機としてサイバーコミュニティを活用している傾向が示された。とくに、韓国の場合、学縁関係のサイバーコミュニティへの参加率が最も高い。この章では、さらに、韓国社会で影響力が大きい名門大学出身者ほどサイバーコミュニティ上での活動が活発であることを指摘し、サイバーコミュニティへの参加が縁故主義を強化するツールであることを主張する Kim, Yong-Hak 氏の研究成果を詳細に紹介しつつ、「縁故強化仮説」の理論的検討がおこなわれている。第六章においては、サイバーコミュニティの社会的機能に焦点を充てた考察がなされている。サイバーコミュニティを(1)関係重視型サイバーコミュニティと(2)情報交換型サイバーコミュニティに分類し、それぞれの「縁故維持機能」と「情報縁形成機能」について論じている。また、日韓におけるサイバーコミュニティへの参加行動の特徴およびその機能の相違について比較分析がなされている。第七章においては、サイバーコミュニティへの参加による「縁故強化仮説」および「情報縁補完仮説」を実証的に検証するため4つの仮説を設定し、それぞれについて社会統計学的検証が行われた。単相関分析では、一部において有意な相関関係がみられるものの、多変量解析手法を用いた分析によれば、「学縁の有効性感覚」においても、「情報縁への積極的参与」においても、名門大学出身かそうでないかによる学歴による効果は消失し、サイバーコミュニティに関しては縁故強化仮説も情報縁補完仮説も積極的に支持されず、インターネット自体の影響力は限定的であることが明らかにされている。

韓国は、世界的に見てもインターネットの普及において先進的であり、とくに電子掲示板等を通じた情報発信行動が活発であり、サイバーコミュニティへの参加度も高い。そのような状況で、政治的世論形成や社会関係の再編に関するインターネットの影響がネット普及の初期から盛んに議論されてきた。一方で、縁故主義、とくに学縁に対する弊害が、市民レベルはもとより政府レベルでもたびたび問題視され、マスメディア上でもネット上でも活発な議論が展開されてきた。そうした中で、サイバーコミュニティは、旧弊然とした縁故関係による呪縛から解放するものとして過剰な期待がかけられ、また他方では、実態として縁故主義を助長するものとして非難されてもきた。しかし、こうしたサイバーコミュニティの機能・影響については、一時的な現象観察による表層的議論が多く、韓国でも十分な実証的分析がなされてこなかったという実状がある。本論文は、韓国における縁故主義について、歴史的生成・発展過程、縁故主義的行動の実態・意識等を検討する一方、調査に基づき、サイバーコミュニティの実態的機能や参加状況と、社会的ネットワークの変化との関係等を実証的に検証し、社会統計学的分析から、縁故主義とサイバーコミュニティへの参加とは、有意な関連が存在するとは言えないことを明らかにした。本論文は、韓国社会にとって宿痾ともいえる縁故主義、過剰評価されがちなネットの影響力、という重要な

つ時宜を得た論点を取り上げ、その両者の関連を理論・実証の両面から考察したという点において、この種の研究の分野に新たな地平を切り開いたものとして高く評価できる。

調査技法的制約もあり社会関係資本に関する実態の把握が十二分でないこと、調査という側面においても継時的変化を追うべきこと、縁故主義をめぐる普遍性の考察、等、今後、分析を深めるべき課題も多々残しているものの、本論文で示した成果と研究手法をさらに発展させるならば、当該研究領域において多大な功績を残すことになろう。そのために必要な視座と学識は、本論においてすでに十分披瀝されている。

よって、本審査委員会は、本論文が博士（社会情報学）の学位を授与するにふさわしい水準に達しているものと判断する。